

アメリカの クライアントたち

伊東豊雄
いとうとよお
建築家

昨日からサンフランシスコの隣町、バークレー市にいる。昨秋よりUCバークレー校の新しい美術館とフィルムアーカイブの設計に携わっているからである。緑豊かで静かなこの大学街は、かつてヒッピーだった人々が多く住んでいて、アメリカでも有数の知的レベルの高い土地であると言つ。昨日は市長、大学の学長以下大学の関係者や美術館のボードのメンバー等約七十名に対して最初のプレゼンテーションが行なわれた。

このプロジェクトへの基本構想を初めてクライアントに問うたのである。自然主義者も多いので、建設への反対意見も強いと聞いていたのだが、好評のうちに無事第一関門を通過してホツとしているところである。

私達の仕事は年中クライアントへのプレゼンテーションの繰り返しである。コンペティションでの各段階でクライアントの納得を得られなくては次のステップに進むことができない。

UCバークレーの美術館は、私にとってアメリカでの最初の仕事である。というのもアメリカで設計をすることにはややためらいがあったからだ。何故ならアメリカでの設計者選定は、ヨーロッパやアジア各国のように提案の優劣、

即ちコンペティションによって競い合うのではない。多くの場合、建設資金を寄附するボードメンバーのインタヴューによって決定される。彼等の大半は功成り名を遂げた資産家達で、アート等に対して深い愛着を抱いているが、建築に対しては全くの素人である。中高年の女性が多く、建築自体よりも、設計者の食事や言葉遣いのマナーに関心を抱いている人々も多いと聞いて、二の足を踏んでいたのである。

でもバークレーではそんな心配は無用だった。彼等のほとんどはとても気さくで知的な人々である。良い美術館をつくるために実際にフランクで活発な議論が繰り広げられている。そして毎晩のように、そうした人々の家でのパーティに招待される日々である。☺